



講演「NUMO包括的技術報告書
(セーフティケース)について」
に係る概要報告

令和元年12月5日

シンビオ社会研究会 吉田民也

シンビオ社会研究会の活動における エネルギー勉強会について

- シンビオ社会研究会の3つの活動
 - A：新システム学分野を中心に研究談話会などを行う研究調査グループ
 - B：エネルギー・環境問題の理解向上を図り勉強会などを行う社会啓発グループ
 - C：異種事業間を媒介するべく事業交流会を企画する事業交流グループ
- グループBでは、2017年度の勉強会のテーマとして、高レベル放射性廃棄物（HLW）の処分問題を取り上げ、講演・討論会を開催した。
- その際、原子力発電環境整備機構（NUMO）の専門家を京都に招き、HLWの基本知識、地層処分の方法とその安全性、国の方針と事業の進め方、科学的特性マップ、諸外国の状況、国民への理解活動などHLW問題に関する一般的内容の説明を受けた。
- 参加者は当会会員のほか、案内先の会員外の方々。

前回の勉強会における意見の例

【国の関与について】

- 国が逃げている感じがする。原子力委員会も同様だ。方法を変える必要がある。
- 国が国有地に処分地を国有施設として造れば反対する人はいないのではないか
- 市民は技術的な話はある程度理解できると思う。しかし自治体の合意が要件なら、国の相当のリーダーシップがないと現状ではほぼ実現不可能だと思う。

【NUMOの活動、位置づけなどについて】

- NUMOがセミナーなどで理解活動をしていることには敬意を表するが、反面、自治体が積極的に開催するという感じではない。
- 自治体に対してリスクを上回るメリットがあると伝える必要がある。
- NUMOが国策民営で押し付けられている感じがする。
- NUMOを電力会社がバックアップしているが、自由化後は電力会社自体がどうなるか先行きが不透明になった。

今年度のエネルギー勉強会

- HLW問題を深掘りすべく勉強会のテーマに取り上げ、再度NUMOの専門家を招き、昨年、NUMOが公表した「包括的技術報告書(セーフティケース)」の内容の説明を受け、討論を行った(2019.11.13)。
- 「包括的技術報告書」はNUMOがどのようにして安全な地層処分を実現しようとしているかを説明する目的で作成。
- 地層処分の安全確保に必要な技術的内容(=セーフティケース)
 - ・ 地層処分に適した地質環境の選定とモデル化
 - ・ 地質モデルをベースとした処分場の設計と工学技術
 - ・ 処分場閉鎖前の安全性の評価
 - ・ 閉鎖後長期の安全性の評価
 - ・ 不確実性への対処、ナチュラルアナログによる傍証
 - ・ 今後の予定(各学会等を通して他分野を含む専門家とコミュニケーションを図り、技術的信頼性の確認結果を公表・発信)

今回の勉強会での質疑・意見例

- 日本の何処が一番地層が安定していて妥当な地点なのか？
- 2015年の最終処分基本方針の改定では「HLWの可逆性、回収可能性を担保」とあるが、どのような代替オプションがあって、どこがどのように行うのかという具体的なものがあるのか？
- HLWの回収ができなくなるタイムリミットはいつか？ それまでに分離変換技術を完成させる必要があるとの議論になる。フランスではそのような議論を通して回収可能性を言っている。
- 直接処分技術にどう取り組むのか？
- 福島事故後は原子力のコンセンサス、軽水炉を動かし高速炉サイクルを開発し廃棄物を最終処分するという従来モデルからシフトしている。廃棄物のカテゴリーも従前のモデルではなく、福島廃棄物も含めて収納するような新しいモデルが必要と思う。現行の活動を進めながら最終的にそれらを包括できる活動になっていないといけないだろう。NUMOとして、現行活動を進めながら新しいモデルを包括できる活動について内部でも議論していただきたい。

勉強会実施結果の公表と 原文財団主催全国交流会への参加

- 勉強会の結果は、当会のホームページ（Symbio News & Report）に発表資料や報告書などを掲載して公表している。
- HLWに関する勉強会に関しては、（一財）原子力文化財団の「地層処分事業の理解に向けた選択型学習支援事業」に応募して実施。
- 2017年度の勉強会については、活動の一環として、同財団が実施する「全国交流会」に参加した。
- 全国交流会での主なプログラム
NUMOによる最近の動向の説明
特色ある活動をした団体による活動成果の発表
参加全団体をグループ分けしての意見交換会と小発表会
- 特色ある活動として、SNSなどで情報を発信し、その反応を「伝えたよシート」に記録し、それをメンバーで議論して次につなげる活動などの事例発表があった。